

---

# ライダーの世界がもしも一つだったら ~ライダーワールド~

sinne-キヨノリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ライダーの世界がもしも一つだったら〜ライダーワールド〜

### 【Nコード】

N8328Y

### 【作者名】

sinne - キヨノリ

### 【あらすじ】

もしも全てのライダーの世界が一つだったら・・・。そんな作者の想像から生まれた小説です。主人公は誰がどう言おうと剣立カズマと辰巳シンジとかリイマジ。オリジの出番はリイマジと比べると少ないかもです。完全ギャグです。キャラ崩壊も含みます。結構ありがちな設定とかが出ますが気にしないで下さい。

「話」「カズマのストレス：鈴海姉弟の恐怖」（前書き）

カズマ「で、新小説始まったけど・・・」

一真「どうしたんだ？」

カズマ「俺が最初から・・・」

一真「ま、それは見てのお楽しみだ」

ララ「なんか似たような小説あるかもしれないけど、これはもう本当に作者の妄想だからね」

弟切「・・・」

## 「話「カズマのストレス：鈴海姉弟の恐怖」

彼は、其処に立っていた。

「はあ……。今日も遅刻かあ……」

青年、創立カズマは溜息をついていた。

彼はBOARDという会社の社長（代理）。

最近夜が眠れないらしく、遅刻しがちである。

「カズマ。お前今日も遅刻か……」

カズマの先輩である菱形サクヤは言った。

「最近アイツらが煩くて眠れないんだよ」

「大丈夫か？」

「まあ、ね」

サクヤはカズマを心配している。

「お前は一応社長代理なんだぞ。ちゃんと健康管理とかしろよな」

「はいはい……。はあ……」

彼はサクヤに言われながらも、溜息をついていた。それは、彼が住んでいる所の隣部屋の人物のせいなのだが……。  
その人物は、カズマの真後ろに居た。

「うえあっ！」

「おはようございますカズマさん！今日はソウジさんが社会科見学として僕とアスムを連れてきてくれたんです！」

「すみませんカズマさん。でも楽しそうだったので、昨日は眠れなかったんです」

「よ、カズマ」

ワタルとアスムとソウジ。

ソウジは実家に住んでるので原因にはなっていないのだが、この子供二人。アスムとワタルが昨日色々どんちゃん騒ぎをしていて眠れなかったのである。

「おーまーえーらー」

「まあまあ、怒らなくて良いだろう。実際、二人は今日を楽しみにしてたんだからな」

ちなみに、見学予約はしっかりとってある。だからこそ、カズマは余計イラついている。

「カズマ、アンデッドがでてK「剣崎さんとムツキ行かせろ、俺は社会科見学してる子供達の相手をしなくちゃならない」

「カズマ落ち着け！」

「俺は此処の社員じゃないぞ！」

サクヤの言葉にカズマは八つ当たりするように言う。

ちなみに、ムツキはともかく、剣崎はBOARDに入り浸ってはい  
るし、ブレイバクルはもっているが、BOARDの社員では無い  
為、ただとばつちりをくらっているだけだ。

「じゃ、ソウジさん、この二人の子守は俺がしとくんで、ソウジさ  
んはZECT見に行つててください。天道さんが何やらかすか分か  
りませんし、弟切さんは弟切さんで貴方に誤解される事しそうです  
し、加賀美さんは加賀美さんで熱くなりすぎて色々ありますし。ア  
ラタさんも加賀美さんと一緒になってやらかしそうですし、行った  
方が良いと思いますよ」

カズマがZECTの心配をするも

「いや、俺も実はBOARDの中を見てみたかったんだ。まあ、あ  
つちは天道と弟切に任せるからな。変な事やらかしたらアイツに制  
裁くらわせるつもりだしな」

「アイツって……。もしかして、鈴海ルルですか？それとも姉の  
方ですか？」

ソウジは笑っていった。

「どっちもだ」

「それは逆らえないですね……」

カズマは苦笑いする。

\*\*\*\*\*

所変わってこちらは鳴海探偵事務所。

左翔太郎と園崎来人ことフィリップが事件の話をしていた。

「翔太郎、今日も事件だよ」

「何だ？今度は」

フィリップは言う。

「何だか、不審者っていうか、変な人が出るらしい。発見者の証言によれば、その人の顔は恐怖するほど恐ろしいらしい」

「誰だ？」

「うーん、証言によると、男性で、青い服を着ていて、青いバイクで・・・」

「分かった・・・。剣立カズマだろ。アイツは、最近溜まってるらしいからな」

「今日も、とばかりで剣崎さんとムツキがアンデッドの封印に行かされたって」

「おいおい、ムツキはともかく剣崎は社員じゃないだろう・・・」

「顔出してるしライダーになれるからって理由でらしい・・・」

「はあ・・・」

そのカズマの行動には、翔太郎も呆れていた。

\*\*\*\*\*

喫茶店兼宿泊場所のマリンチェリアには、鈴海ララとルルが居る。

「で、ソウジさんにストッパー頼まれたの？そのまま」

「うん・・・断りきれなくて・・・」

「まあ、良いけど。じゃ、ZECTに行くよ」

「うん」

二人は、ZECTに行く事にした。

＼ZECT＼

「てわけで、ソウジさんに頼まれて、何かやらかしたら私達が制裁を下します」

ララは弟切ソウと天道総司と加賀美新とアラタに言っていた。  
超絶の笑顔で。

「あ、ああ・・・」

弟切ソウはソウジに擬態したワームだ。

ララの使えそうだから生かしておいてという言葉だけで生きれているワームだ。



ララの言葉の力は多大で、ララに逆らうとまずい事があるという噂がある。  
なので、弟切ソウはララに逆らえない。勿論、他の加賀美、天道などもだ。

「何かやらかしたら私の権限で弟切さんの命は無いと思ってください」

その笑顔は超怖い。ちなみに、彼女に悪気は無い。大事な事だからもう一度言う、先ほどの彼女の言葉に悪気は無い。

天然Sなのだ。  
なので、逆に弟切や天道は恐れている。

一体、これからこの世界で何が起こるのだろうか・・・？

続く

「話」「カズマのストレス：鈴海姉弟の恐怖」（後書き）

ララ「あとがきは作者との対談！」

作者「はい」

ソウジ「鈴海最強伝説・・・」

作者「ララに質問！」

ララ「何？」

作者「ララって、皆の事どう呼んでるの？」

カズマ「作者なら其処分かれよ！」

ララ「えっと・・・」

ユウスケ ユウスケ君

ワタル ワタル君

シンジ シンジ君

カズマ カズマ君

タクミ タクミ君

ショウイチ ショウイチさん

ソウジ ソウジさん

アスム アスム君

五代 五代さん

津上 津上さん

真司 城戸君

乾巧 巧さん

剣崎 剣崎さん

ヒビキ ヒビキさん

天道 総司君

野上 良太郎君

紅渡 渡さん

士 士君

左翔太郎 翔太郎君

フィリップ フィリップ君

映司 映司君

弦太朗 弦太朗君

だよ！」

カズマ「長い説明有難う！」

二話「映司の苦勞：子供達（+ソウジ）の社会科見学（前書き）」

映司「二話で早速僕の身に何が……」

カズマ「さあ？」

タクミ「はあ……」

アスム「今回は師匠出してくださいよ……」

ララ「今回は無理かも……」

## 二話「映司の苦勞：子供達（+ソウジ）の社会科見学

子供二人と三十路は上機嫌だった。

ずっと気になっていたのだろう。

BOARDの中身が。

「　　」

「子供達とはかく、ソウジさんは上機嫌にならないでください、  
なんだか三十路の人がそんなことしていると正直引きます。えーっと、  
こっちは情報管理室です。アンデッドについての情報がびっしり  
詰まっていたりするので、あまりこの中に人は入れないです」

「アスム！見てください！パソコンが沢山あります！」

「パソコン・・・ですか・・・？」　あまり機械には慣れていない

「ふむ」

「で、こっちは訓練室です。まあ、特にムツキとか剣崎さんとか色々な人が入り浸っています」

訓練室にカズマが案内した、その行動が、駄目だったのかもしれない。

「カズマさん！訓練ですか！？少しやらせてください！」

と、アスムがこんな事を言い出したのだ。

「え？」

カズマは驚いた。鬼の修行をしてるとはいえ、こんな子供が大人のやるような訓練をするのは・・・と思ったのだ。

「大人と同じプログラムにしてください！」

「ぼ・・・僕は遠慮します・・・」

「俺は・・・少しやってみようか」

という事で、何故か丁度悪いタイミングで帰ってきてしまった剣崎を巻き込んで、カズマもやる事になってしまった。

「えーっと、じゃあ、かるーく説明します。まず、模擬戦をします」

「「どんだけリアルな訓練なんですか!？」」

アスムと見物者のワタルが言った。

「なら、やらなくていいんだけど、アスム」

「でもやります!」

「えっと、この機械の中に入ってやります。この機械は総て連動してるので、まあ、丁度俺と剣崎さんとアスムとソウジさんで四人だから二対二で出来るね。剣崎さん」

物凄い笑顔でカズマが剣崎に言った。

剣崎は

（コイツ絶対それ分かってて引き止めたな・・・！）  
と思っていた。

ちなみに、チーム分けは  
アスム・ソウジ：カズマ・一真  
になった。

「準備はいいですか？じゃあ、レディ・・・ファイツ！」

「・・・・・・実況兼審判はワタル、解説は俺、相川始でやらせてもらっ

『おい！』

意外な人物、始が居た事に剣崎は突っ込む。

「黙れケンジャキ」

\*ちなみに作者は始さんの性格分かってません

『というか、もう戦闘は始まってますよ！』

「おーっと！余所見をしている剣崎さんにアスムが特攻を仕掛けてきます！が！」

『うええええええええええ！』

『剣崎さん！危ない！』

「おーっとカズマさんが剣崎さんを助けに入った！解説の相川始さん、これは一体どういう事でしょうか？」





『つていつか社会科見学は何処行った!』

『そんなのはもう宇宙の彼方に行きました!』

「アスムは少し自重してください!」

「……（アイツ、本当にジョーカーに出来るな……）」

ちなみに、カズマは何やかんやで剣崎さん守ってます。

\*\*\*\*\*

「翔太郎」

「何だ？フィリップ」

フィリップは、相棒の翔太郎に言った。

「映司が、翔太郎に相談したい事があるって」

「……はあ……」

「どうしたんだ？映司」

「ああ……聞いてくれよ……」

「あ、ああ……。まあ、とりあえず座れよ」

翔太郎は映司を椅子に座らせる。

「で、何だ？映司」

「あ、ああ……。実はな……」

映司は一息ついていった。

「アंकが夜中ずっと煩くて寝れないんだ。そして、外に出たかと思うと、ヘマをするガメル、ウヴァ、カザリ、メズールに毎回出会ってフォローして、アंकがアイスアイスうるさくて、拳句の果てに飛ばされてきた弟切さんにぶつかって……」

「……………。よし、ララの所に泊めてもらえ、あそこなら安全だしな」

「アंकには、僕たちから言っておくよ」

「うん……。頼む……」

続く

## 二話「映司の苦勞：子供達（+ソウジ）の社会科見学（後書き）」

意外に社会科見学の話が・・・。

飛ばされてきた弟切・・・。多分ララに飛ばされたんだと思います。何かへマして。それがソウジさんにやられたか、加賀美に巻き込まれたか、天道に振り回されたか。

では、また次回お会いしましょう！

三話「社会科見学終了：天道総司対鈴海ルル（前書き）」

カズマ「社会科見学に結構時間使ってるよな・・・」

ユウスケ「・・・」

ルル「それにしても、まだあまりコツチの様子が出てないな・・・」  
ララ「だから今回でるんだよ！」

### 三話「社会科見学終了：天道総司対鈴海ルル

「えっと……。じゃあ、次は……」

「僕、社員食堂に行ってみたいです！」

カズマの言葉を遮ってワタルが言った。

「へ？何で？」

「だって、どんなところか見てみたいんですよ！」

「あ、僕も見たいです！それに、土さんと師匠がはじめてあった場所ですし！」

「は……はあ……。ソウジさん、剣崎さん。其処で良いですか？」

「ああ」

「良いけど……。てか俺も一緒に行く前提なのかよ！」

何気に巻き込まれてる剣崎はともかく……。一行は社員食堂に行く事となった。

「……ドンマイ、剣崎さん」

「……頑張れよ、剣崎」

ちなみに、陰からムツキとサクヤ、それに何故か橘も剣崎を見守っていた。

\*\*\*\*\*

「じゃ、ZECTのみなさん　ちゃんと仕事してくださいね！」

「しないと締める」

「「「は、はいいいいいいいいいい！！！」」」」

「ある意味恐怖だな・・・」

「俺は誰からの指示も受けない。俺は俺の道を行くだけだ」

「天道、この二人には逆らったら駄目だって・・・。はあ・・・」

「加賀美は大丈夫だと思うが、だって、一応、トップのご子息なんだしさ・・・」

ゼクトルーパーの皆さん、弟切、天道、加賀美、アラタの順番で喋っている。

ちなみに、加賀美の父がZECTのトップな為、本当にララとルルは最初から加賀美に手出しするつもりは無い。

「じゃあ、最初は訓練しましょう」

「・・・あの・・・ソウジからの・・・言葉なんだ・・・。逆らったら・・・まず弟切は・・・無事じゃ済まないって・・・。分かってるよな・・・。クロックアップして・・・。ボコって・・・」



「うん・・・あり・・・が・・・と・・・」

「おい、おきろー！おーきーろっ！」

ボタン。

映司はついに倒れた。

ちなみに、ララとルルがその場を離れた為、サボっていたら制裁する  
という条件付きで各自仕事をする事となった。

\*\*\*\*\*

一方、BOARDでは、意味不明の料理対決が始まっていた。  
それまでの経緯は・・・。

『お、ソウジ』

『ん、津上か、何故お前が此処に居る？』

『ああ、実は、何回か此処で見てるんだよ。社員食堂の料理とか色々』

『成る程な』

『で、ソウジ。お前におでん対決を申し込みたいんだ』

『ああ、いいが』



という事で、おでん対決・・・もとい、料理対決が始まったのであった。

「俺達を無視して話を進めるな――！！！！！」

カズマの渾身の突込みが入る。

「まあ、良いじゃないですか。僕達も丁度お腹が空いてきた頃ですし」

「はあ・・・分かったよ」

「よし、行くぞ、ソウジ」

「何処からでも掛かって来い」

「よーいつスタート！」

そして、数十分後

「はい、これが俺のおでんだ」

「天堂屋の伝統のおでんだ。具が少ないと言っつなよ」

（色々すつとかばして結果発表）

「で、結果は？」

「「「「・・・ソウジさんの」「」 ソウジからの気迫が凄かった

「はあ・・・なあ、もう帰って良いか？気付いたらもう帰る時間なんだが・・・」

「あ、確かにそうですね。僕たちもう帰ります」

そして、社会科見学は終わったのだ。  
最も、数人は被害にあったようだが。

「・・・広瀬さん」

「どうしたの？剣崎君」

「・・・俺、疲れました・・・」

「・・・」

\*\*\*\*\*

「あ、カズマ君、アスム君、ワタル君。お帰り。で、ごめんけど、今夜はあまり騒がないでね」

「何ですか？」

「今日は、映司君を泊めてるの。だいたいぶつかれてるようだったから、静かにしてね」

「「「はい」「」」

続  
く

三話「社会科見学終了：天道総司対鈴海ルル（後書き）」

ララ「ちなみに、カズマ君達三人は私の家に泊まってるの」  
ルル「カズマが保護者代わりなんだってさ」

カズマ「あと一人泊まってるの。まあ、言わないけど、まだ」  
ララ「じゃ、時間が無いからさいなら」

#### 四話「シンジの出勤：W龍騎の恐怖（前書き）」

シンジ「サブタイトル考えた奴ぼこる」

真司「……………」

リュウガ「……………」

\*本作品にはリュウガも登場するっぽいですが（作者はリュウガについて大して知識はないです〓無謀）

#### 四話「シンジの出勤：W龍騎の恐怖」

「遅れるー！！！！！！」

青年、辰巳シンジは、急いで出勤していた。

彼はバイクを持っていない為、無論、全力疾走だ。

「あゝもう！あいつら騒ぐなって言われてたのにまた騒いで！あの三人怒らせたら後が無いって分かってるだろ！」

「シンジ〜」

「カズマ！」

全力疾走するシンジの横を、ブルースペイダーに乗ったカズマが通りかかる。

「今かまってる暇は無いんだ！僕は行くからな！」

「なら、俺が連れてってやるよ」

「いいのか！？」

「ああ、幼馴染のよしみとしてな」

\*この小説ではリイマジ組は年齢が近い人たちは大体幼馴染という設定です。

例えばショウイチとソウジ。カズマとシンジとユウスケとタクミ。アスムとワタルとタクミ。

タクミの名前が二つ拳がつてる理由はいいません。

「じゃ、ありがたく！」

そして、シンジはカズマに乗せて行つて貰つた。

\*\*\*\*\*

此処はATASHIジャーナル。辰巳シンジの働いてる場所である。

「レンさん！遅れてすみません！」

「ああ、シンジか」

彼は羽黒レン。辰巳シンジのパートナーである。

こちらこそ、ホモとか言うんじゃない、ヤンデレとか言うんじゃない。

「どうしたんだ？遅れるなんてお前らしくないな。ま、行くぞ」

「はい！」

\*\*\*\*\*

「は、今日は休みか」

こちらは城戸真司。辰巳シンジとはとても仲が良い。

城戸真司はOREジャーナルというところで働いてる、だが、今日は特別休暇を貰って暇にしている。

現在、ブラブラとしている。

「あ、城戸さん」

「あ、えっと……。シンジの幼馴染の一人の……」

「小野寺ユウスケです」

「あ、そうそう。で、どうしたんですか？」

\*ちなみに作者は龍騎未視聴の為、城戸さんの性格これで良いのか  
分かりません……。

「いえ、なんでもありません。見かけただけなので」

「あ……。はあ……」

そう言ってユウスケは去って行ってしまった。

「一体、なんだったんだろう……」

\*\*\*\*\*

「ふー、今日も取材終わった」

「シンジ」

「あ、何ですか？レンさん」

「今日はもう帰って良いぞ。城戸は今日特別休暇で暇してるからな、  
相手してやれ」



「はい」

\*\*\*\*\*

「きどさん」

遠くから辰巳シンジが走ってくる。

「あ、シンジ。どうしたんだ？」

「レンさんが城戸さんが暇してるから相手してやれって」

「へえ・・・」

「うん。そうだ。マリンチェリア行きますか？」

「え、ララちゃん達に迷惑じゃないかな・・・？」

城戸はそう思いながらも、辰巳シンジに連れられてマリンチェリアに来た。

「あ、シンジ君おかえり」

「城戸・・・いらっしやい・・・」

「相変わらずルル君は無愛想だな」

城戸は苦笑いしつつ席に着く。

「あれ？いつも居るアスム君とワタル君は？」

「プティラに制裁を下されてる途中だよ」

フラちゃんがそう言うて、よく耳を澄ましてみると……。

「あ、やめてください！映司さん！目を覚ましてください！」

「ごめんなさい！もうしませんから！もう夜に騒ぎませんから！」

[illegible]

「つていう事で」

「「っという事で済む問題じゃないだろ！」」

W  
シンジは突っ込んでいた。

「わああああああああ！！！！やめてください良い良い良い良い良い良い良い意！」

「子供に何してんだあの人！」



続く

#### 四話「シンジの出勤：W龍騎の恐怖（後書き）」

ララ「映司君の受難？」

ルル「映司が怒るのも仕方ない」

映司「何あれ龍騎怖い龍騎が怖すぎてどうしようもない・・・」  
「ブツブツ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8328y/>

---

ライダーの世界がもしも一つだったら～ライダーワールド～

2011年11月27日20時48分発行